



はじめに

開業 23 年、日々さまざまな症状の患者さんが来院される。

患者さんは治療効果を期待され、ぼくはその期待に応える側にある。しかし、現実には患者さんが治して欲しいという願いを叶える事が出来ないことが多い。現状では効果を発揮できる範囲の患者さんが来院している状態だ。だが、私が効果を発揮できる守備範囲の潜在需要は相当なものではある。

叶える事が出来た症状はすぐ忘れるというか、印象に残らない。

確実に印象に残るのは、患者さんの期待を叶える事が出来なかった症状だ。時としてそれは強烈な印象として心に焼き付く。これが鍼灸治療の限界か？無念に感じることもある。

これまで、私が越える事が出来たハードルは、3冊の書籍にまとめ、誰でも分かるよう、実践できるよう、心がけて出版した。

これから綴る運動刺絡は

「ニヤンともカンタン！ニヤルホド効果バツグン」

実際にやってみれば、誰もが効果を実感できるはずだ。

もくじ

はじめに (1)

- 第1章 運動刺絡とは？(4)
 - 運動井穴刺絡は可能か？(7)
 - 運動刺絡のドーゼ(9)
 - 運動刺絡の注意点(11)

- 第2章 臨床編
 - 症例1 頭痛(16)
 - 症例2 腰痛(26)
 - 症例3 目の疲れ(28)
 - 症例4 風邪(30)
 - 症例5 元気がない食欲ない(32)
 - 症例6 左腕の可動域に制限があり
サーフィンができない(35)
 - 症例7 五十肩 右肩痛(37)
 - 症例8 高血圧(40)
 - 症例9 うつ病(44)
 - 症例10 疲労(49)
 - 脳性麻痺 二次障害の過緊張 報告 廣中敦紀(51)

○おわりに(54)

第1章 運動刺激とは？



運動刺絡とは？

カンタンに「運動刺絡」を解説する。

いわゆる刺絡鍼法がある。刺絡鍼法とは三稜鍼で皮膚の表面をごく浅く切り、微量の出血をとまなう鍼法の事である。極めて高い治療効果を発揮する。私は刺絡鍼法講習会に参加して刺絡を度々学んだ。こんなにバツグンな治療効果があるのに、鍼灸学校でなんでちゃんと教えてくれなかったのだろうか！

その刺絡の中に、吸角刺絡というものがある。吸角というガラスの容器を使い、それに吸引をかけ刺絡した出血を促す（吸い上げる）のである。肩こり腰痛等だけではなく、あらゆる治療に時として絶大な治療効果を発揮する。今では効いて当たり前の感覚だが、刺絡鍼法を始めた時は治療レベルがグッと上がったと実感した。

治療をしているうちに、だんだんそれが当たり前になってくる。ある時ふと頭をよぎった。「今までのお灸や鍼などの治療は何だったのだろうか？ムダな治療方法だったのだろうか？」だがそれらの治療法も良く効いた経験を何度もしてきた。「それらを刺絡とともに活かす方法はないものだろうか？相乗効果を工夫できないものか？」と考えた。

刺絡に出会う前の私は、お灸それも直接灸を主力にしていた。理由は一にも二にも効くからだ。そこで直接灸と刺絡の組み合わせは可能だと考え、組み合わせて治療することにした。

例えば腰痛の患者を触診し至室穴に硬結を認めたとする。そこへ施灸すると、硬結がやわらぎ、腰痛の軽減となる。施灸部は血行が盛んになり発赤している。そこへ刺絡をしてみた。直接灸と刺絡の組み合わせである。もちろん刺激がその分強いので、灸も刺絡も少なめにした。これを私は「お灸刺絡」と名付けた。

そこに吸角を当ててみた。お灸の次に吸角刺絡を行ったのである。吸引するとよりたやすく出血をすることができた。お灸と吸角刺絡という事で「お灸吸角刺絡」と名付けた。

その頃、刺絡の勉強実技で吸角刺絡をする時、指導してくださる先生が「あれ？思うように出血しないな～」と吸角を揺すっているのを見た。

私は「ああやって刺激を与えるんだ」と見入っていた。「カップを外から刺激を与えるなら、体の中から刺激を与えるという方法もあるな」と気づいた。つまり運動針の応用だ。

早速、治療院で吸角刺絡をした状態で運動刺激を試してみた。肩に吸角刺絡をして、肩や腰を動かしてもらうのである。すると吸角部の筋肉に刺激がきて、動かすたびにドッドッと出血を観察した。するとスッキリ症状が消失すると患者さんから報告を受けた。何度も行っていると吸角の吸引の具合や、運動のかけ方の要領が数を重ねるにつれ分かってきた。詳細は臨床編で述べる。

私は運動と吸角刺絡の組合せという事で「運動吸角刺絡」と名付けた。これだけでかなり治療効果の向上を見たが、お灸も合わせ「お灸運動吸角刺絡」へと発展した。ただ運動のかけ方、ここに課題を感じていた。

ある日、福岡市鍼灸会館にて体操法の講習会があった。たまたま奈良の親しい鍼灸師が操体法を勧めてくれたので参加してみた。操体法の講習を受けながら、ふと30年前東京に住んでいた時に初めて操体法に参加した頃を思い出した。鍼灸師になる前の頃だ。

巨大ともいえるお寺の広々とした畳が敷きつめられた中、大勢の参加者がいた。とても偉そうな先生が、当時の私にはよく理解出来ない操体法のお話を延々とされていた。「ああ難しい、ああめんどくさい」という気になってきた。すると最後に「究極の操体法とは寝返りです。無意識の運動だからです」といわれ、それだけを今で